



社会言語科学会ニュースレター

The Japanese Association of Sociolinguistic Sciences

第 16 号

2003年9月12日

発行：社会言語科学会事務局

〒214-8580 川崎市多摩区東三田2-1-1 専修大学文学部加藤研究室気付

電話/Fax: 044-911-0689 E-mail: thb0308@isc.senshu-u.ac.jp

(事務局移転に伴い E-mail アドレスを変更する予定です)

<http://www008.upp.so-net.ne.jp/jass/>

〈巻頭言〉

ご挨拶—総合の学の展開を目指す—

社会言語科学会会长

大阪大学大学院人間科学研究所

大坊郁夫

われわれの住む社会は、時空間的には拡大しつつも、その中にあって人はむしろ行動の術を適切に使い、漂い始めていると思われます。現実に、われわれは以前に比べて、生活のための多くの選択肢を得ています。しかし、選択の可能性が拡がるにつれて、そのコミットメントは希薄化し、時空間の密度は低下していると言えましょう。

また、絶えない国際的、民族的な争い、了解し難い反・非社会的な行動の増加など、解決しがたいことが増えています。このような状況に無縁な人はあり得ません。解決に向けた努力を滞らせることはできません。そして、科学することの意味・目的は常に社会との関連で問われなければならないことも自明ではないでしょうか。

人は一人では立っていられません。互いに支えられてこそその存在です。その最も基本的な行為は、意を

伝え合うことです。そのために、それぞれの文化との関連で機能する規則によって広義の言語を用いてコミュニケーションをするのです。そこには、多様な要因が作用し、多くの表現の形があります。このことからすると、既存の伝統的な学問タイプの域を超えた総合的な研究姿勢と成果の統合が必要です。正しく、この視点に立つところから本学会がスタートしたと言えましょう。初代会長の徳川宗賢先生の学会発足に当たってのご挨拶にも明確に謳われています。

学際的な性格を持つ組織には、常に創造の意欲と刺激があります。それは、本学会の多くの研究発表や活動に示されています。このことを改めて認識したいと思います。ここに集う会員は、それぞれに異なる出自にありながら、社会言語科学(Sociolinguistic Sciences)という諸科学を結ぶ趣旨に賛同し、相互に刺激し合うことを期待しておられるはずです。それ自体がこの学会のエネルギー源となるものです。各人の学問的背景を密に持ち寄り、融合することを楽しみたいものです。超領域的な結びつきを旨とし、それぞれの持つメリットを提供し合うよう心がけたいものです。

目次

- 2 … 第12回研究大会プログラム
- 5 … 社会言語科学の未来を作る会第3回集会のお知らせ
- 5 … 博士論文情報
- 6 … 学会誌「社会言語科学」特集号テーマの募集・書評候補の募集
- 6 … 研究最前線

つまり、学会スタート時の徳川先生の言にありますように、自由な発想を大事にする、「学問の共和国」を建設したいと考えています。ただし、このような集合性を旨とする場合には、各学問領域の自立性を尊重することと相互の反発が表裏になる危機も含んでいます。本学会創設時に比べて会員数は増加し、当時の2倍強の1100名になろうとしている状況にあっては、学会としての一体感をどう形成し、維持していくかは重要であり、日常的な点検事項とも言えましょう。また、バラエティのある学会活動、融合型の活動成果の産出（現在進行中の「講座社会言語科学」全6巻はその一つ）にさらに大きなエネルギーを注ぐことが必要と考えます。

井出祥子前会長の後を引き継ぐことになりました。多方面を配慮され、豊かな包容力と決断力を持ってこれまで運営されてきた井出先生に比するに私は非力であります。同時に、学会を担う者達も創設時の方々から次世代の者へと移行しつつある状況ですが、

皆様と密に連携をとらせていただきながら、会員それぞれがここに集うことによって提供していただけることと得られることがうまくバランスし、融合の力を發揮できるようになることを念頭におきながら、努力させていただく所存です。なにとぞよろしくご協力をいただけますようお願いいたします。

なお、このたび、第12回大会（10月4, 5日）を大阪大学吹田キャンパスで開催させていただきます。交通至便とは言えないところではありますが、多くの方のご参加をお待ちいたしております（交通アクセスにつきましては、

大学（広域）

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/accessmap.html>

吹田キャンパス

<http://www.osaka-u.ac.jp/jp/about/map/suita.html>

をご参照ください。）

（だいぼう いくお）

第12回社会言語科学会大会プログラム (大阪大学大学院人間科学研究科共催)

日時：2003年10月4日(土), 5日(日)

場所：大会会場：大阪大学コンベンションセンター（大阪大学吹田キャンパス）

懇親会会場：阪大病院14階スカイレストラン（リーガロイヤルホテル経営、貸切）
(モノレール駅の向い、万博公園・太陽の塔を望む。)

費用：(事前登録は不要です。直接会場へお越し下さい。)

会員	非会員	非会員学生	一般	学生
参加費：	1,000円	3,000円	2,000円	懇親会費： 6,000円
予稿集：	2,000円	2,000円	2,000円	2,000円

プログラム

(最新情報は学会ホームページに掲載されておりますので、併せてご覧ください。)

第1日目10月4日(土)

9:30 受付開始

10:00 開会

10:00-10:45 基調講演（3階MOホール）

会話と身体的情報：コーパスにもとづくインタラクションの分析を目指して

片桐恭弘（ATR メディア情報科学研究所）

10:50-12:05

研究発表1：A会場（2階会議室2）

研究発表2：B会場（2階会議室3）

12:10-13:00 理事会（1階研修室）

13:00-13:30 総会（3階MOホール）

13:30-13:45

第三回徳川賞授賞式（3階MOホール）

14:00-15:30

講演【会場：3階MOホール】

沈黙と会話－コミュニケーション研究のもうひとつの地平

野村雅一（国立民俗学博物館民族学研究開発センター・総合研究大学院大学）

15:30-17:00 ポスター発表（3階ホワイエ）

18:00-20:00

懇親会（阪大病院14階スカイレストラン）

第2日目10月5日(日)

9:30 受付開始

10:00 開会

10:00-11:15

研究発表3：A会場（2階会議室2）

研究発表4：B会場（2階会議室3）

11:20-12:00

徳川賞受賞講演（3階MOホール）

指示的、非指示的意味と文化的実践－言語使用における「指標性」について

片岡邦好（愛知大学）

台湾における言語接触（シンポジウムにて徳川賞講演）

簡月真（大阪大学）

13:00-14:15

研究発表5：A会場（2階会議室2）

研究発表6：B会場（2階会議室3）

14:20-17:00

シンポジウム【会場：3階MOホール】

環太平洋地域に残存する日本語をめぐって

企画責任者：真田信治（大阪大学）

司 会：渋谷勝己（大阪大学大学院）

話題提供者：簡月真（大阪大学大学院）

[徳川賞受賞講演]

土岐哲（大阪大学大学院）

17:00 閉会

研究発表

研究発表1 [A会場（2階会議室2）]

司会：生越直樹（東京大学）

10:50-11:15

韓国系民族学校における二言語併用の規定要因
吉田さち（東京外国語大学）

11:15-11:40

横浜華人社会の言語接触
野村和之（東京大学）

11:40-12:05

橋渡し言語から群れ言語へ～ヨーロッパ統合下で
変容するエスペラントの位置づけ
臼井裕之（財団法人日本エスペラント学会）

研究発表2 [B会場（2階会議室3）]

司会：松木啓子（同志社大学）

10:50-11:15

三者会話におけるトピックの変遷と会話の展開について
藤本学・村山綾・大坊郁夫（大阪大学）

11:15-11:40

記憶過程の表出としての対話－記憶再生課題を用いた発語・ジェスチャーのマイクロ分析－
細馬宏通（滋賀県立大学）

研究発表3 [A会場（2階会議室2）]

司会：ロング・ダニエル（東京都立大学）

10:00-10:25

中国黒龍江省ドルブットモンゴル族自治県モンゴル人の言語－混合言語（Mixed Languages）と
みなしてよいのか－
包聯群（東京大学）

10:25-10:50

ポスト日本語習得者における中間言語として日本語の実態－インタビューや自然談話に見られる誤用分析を中心に－

黄永熙（横浜国立大学）

10:50-11:15

国家による言語政策と地方（地域）語の対応－フィリピン、セブアノ語の事例より－
松永稔也（大阪大学）

研究発表4 [B会場 (2階会議室3)]

司会：野田尚史（大阪府立大学）

10:00-10:25

日本語の品詞と韓国語の補助動詞「-hada」の切り替え（帰国子女を中心にした在日一世と韓国人留学生との比較）

郭銀心（東京大学）

10:25-10:50

日本語の「ヲ格+移動動詞」構文の成立要因についての一考察—認知的アプローチから—

姚艶玲（九州大学）

10:50-11:15

Negative Question is a Space Builder:
The Other Function of Zyanai as an Evidential Marker

Soichi KOZAI, Yuko MIYOSHI, Mami ISHIHARA, Masahiro TANAKA, Tomohiro TAKAHASHI (関西外国語大学)

研究発表5 [A会場 (2階会議室2)]

司会：西澤弘行（常盤大学）

13:00-13:25

母語使用は教室における学習の組織化にどのような役割を果たすのか—外国人児童生徒クラスの授業会話の分析から—

齋藤ひろみ（東京学芸大学）

13:25-13:50

幼児の会話参加方略ときょうだいの存在

白井純子・中島君枝・Cynthia Patschke・白井英俊（中京大学）

研究発表6 [B会場 (2階会議室3)]

司会：井上逸兵（慶應義塾大学）

13:00-13:25

韓国における商取引談話－コミュニケーションの民族誌の観点から－

吳惠卿（大阪大学）

13:25-13:50

「謝る意識」の対照研究—日本と台湾を中心には
鄭加禎（広島大学）

13:50-14:15

アコモデーション行動としての「第三者返答」—外

国人や身体障害者はなぜ無視されるのか—
オストハイダ・テーサ（筑波大学）

ポスターセッション[会場(3階ホワイエ)]

P-01 関西方言の広がりと談話上の機能に関する考察
—全国6地点調査から—

友定賢治（広島県立保健福祉大学）・陣内正敬（関西学院大学）

P-02 東京首都圏における関西方言の受容パターン
田中ゆかり（日本大学）

P-03 『民衆時報』から読み取れる在阪朝鮮人の言語状況

金奉仙（広島大学）

P-04 司法通訳人に対するグループ・インタビュー
調査報告

水野かほる（静岡県立大学）

P-05 呼称と二者間の関係性の研究
荒川歩（同志社大学）

P-06 日韓両言語における呼称接尾辞について—その実態から行方を展望する—
宋有宰（金沢大学）

P-07 日韓両言語のあいづちの使用からみた一考察
朴成泰（東北大学）

P-08 日韓断り場面にみられる表情—その機能と相違点—
任火玄樹（名古屋大学）

P-09 意見衝突の場面における日本人と台湾人の行動パターンの対照研究—その対処法を中心に—
黄士瑩（九州大学）

P-10 韓国語の使役形式の「重複」現象に関する機能言語学的研究—文法体系の史的变化の観点から—
石原庸兆・堀江真（東北大学）

P-11 日本語の接触場面会話における自己開始自己修復の協働的構築

義永（大平）未央子（愛知教育大学）

P-12 異文化間交流の会話における他者の声の定式化
吉川友子（岡山大学）

P-13 Intercultural Communication in the Japanese Language Classroom in Singapore:
the relationship between Singaporean learn-

- ers' perception of the teacher and communication gaps
Lai Siew Hoon (九州大学)
- P-14 日本語と英語の文章構造—日本語学習者の電子掲示板上の意見文の分析—
杉本明子 (国立国語研究所)
- P-15 日米の国語教科書の比較研究—問題解決を通じて
杉田梢 (筑波大学)
- P-16 ジェンダーと外国語学習観の関係について：
EFL 学習者と JSL 学習者を対象とした BALLI
による調査結果をもとに
中山晃 (足利工業大学)
- P-17 日本語学習者のネットワークとコード切り換え
樋下綾 (大阪大学)
- P-18 中国朝鮮族の日本語漢字・漢語の習得に関する対照言語学的考察
崔松子・堀江薰・中村涉 (東北大学)・大野真男 (岩手大学)
- P-19 韓国入学者の日本語の終助詞「よ」と「ね」
の習得に関する対照言語学的研究
- 富並美希・堀江薰 (東北大学)
P-20 自然発話における日本語終助詞の研究—ディスコース・ポライトネスの観点から—
福原裕一 (東北大学)
- P-21 文末イントネーションの機能—合成された発話末形式の意味の分解—
田中彰 (麗澤大学)
- P-22 語音象徴性の検討
浅井淳 (大同工業大学)・瀬麻衣子 (カリフォルニア大学バークレー校)・大石弥幸 (大同工業大学)
- P-23 なぜ日本のトークバラエティにはホストがたくさんいるのか：バーバルアートの観点からの考察
井出里咲子 (筑波大学)
- P-24 英語コミュニケーションに見る性差表現：
コーパスを利用した使用語頻度調査
石川有香 (広島国際大学)
- P-25 インターネット掲示板における情報探索的コミュニケーション
笠木理史・大坊郁夫 (大阪大学)

社会言語科学の未来を作る会第3回集会のお知らせ

企画委員会では、研究大会懇親会後、下記の通り、本学会の「第3回未来を作る会」を開催いたします。本学会をよりおもしろく、参加する意義の感じられるものにしていくための意見をぶつけあう会です。「本学会を、このようにしたい」という気持ちをお持ちの方、ぜひ「未来を考える会」にご参加ください。会員の方でしたら、どなたでも参加できます（懇親会、未来を作る会に連続参加された方には、懇親会費を1,000円キャッシュバック !!）

日時：2003年10月4日(土) 20:00(懇親会終了後)～

場所：懇親会会場(阪大病院14階スカイレストラン)

主催：社会言語科学会企画委員会

博士論文情報 (2003年5月29日～2003年9月11日受付分)

○言語外的条件と言語行動の相関に関する言語社会心理学的研究

オストハイダ・テーヤ 大阪大学大学院文学研究科 博士(文学) 2003.3

○日本語・中国語・英語における丁寧表現の比較研究

陶琳(トウ リン) 金沢大学大学院社会環境科学研究科 博士(文学) 2003.3

本学会の趣旨に沿った分野の内容で書かれた、2003年度の博士論文一覧を、順次、ニュースレターに掲載する予定です。(1)論文タイトル、(2)著者名、(3)博士号授与機関、(4)博士号の分野、(5)取得年月の情報を下記までお送りください。要旨・抄録は掲載いたしませんのでご了承ください。

特集号テーマの募集

「社会言語科学」では、特集号を発行しています。これまでに「日本の言語問題」(第2巻第1号),「日本語と言語接触」(第3巻第1号),「電子社会の言語科学」(第4巻第1号),「言語の対人関係機能と敬語」(第5巻第1号),「コミュニケーションの社会言語科学」(第6巻第1号)の特集が実現し、現在「方言」(第7巻第1号の予定)の特集が進行中です。よい特集のテーマがございましたら、学会誌編集委員会委員長までご提案ください。

学会誌『社会言語科学』

書評候補の募集

「社会言語科学」では、毎号2,3本の書評を掲載してきました。書評欄の一層の充実をはかるために、学会誌編集委員会内に書評担当編集委員をおきました。よい書評候補がありましたら、学会誌編集委員会委員長までご推薦ください。ご推薦には、書評対象図書名、書評執筆候補者(会員に限る)、図書の推薦理由(2,3行)をお含みください。なお、書評の投稿につきましても、従来通り受け付けます。

学会誌編集委員会委員長 日比谷潤子 E-mail: jhibiya@icu.ac.jp

研究最前線

「注意」をめぐって

大阪教育大学
串田秀也

しばらく前から学童保育所における保育指導員と子どものやりとりを分析している。保育指導員に限らず、子どもを養育する立場の大人が子供に向けてもっとも頻繁に行う言語行為の一つは「注意」である。この言語行為をめぐって考えていることを少し書いてみる。

注意は会話の中で生じるさまざまな言語行為には見られない面白い特徴を持っている。注意はたいてい、言語的やりとりをそれまで行っていなかった相手に向けられ、この点で「呼びかけ」に近い。ただ、呼びかけが後続する言語的やりとりを期待してなされ、それゆえに会話を始める手続きになるのに対し、注意を行う者は会話を始めることを期待してはいない。この点で、注意は「会話」研究や「対話」研究といった枠組みの中にはうまく収まりきらない言語行為のようである。他方、それは「独り言」とも違う。注意は特定の相手に明確に向けられるからであ

る。ゴフマンは人前で行われる独り言を「焦点の定まらない相互行為」の一部と考えたが、注意は「焦点の定まらない相互行為」と「焦点の定まった相互行為」のいわば狭間に位置する言語行為の一種であるように思われる。このような性質を持つ言語行為は「罵声」「捨てゼリフ」など他にも思い浮かぶ。今後の研究が必要な分野だと思う。

注意という言語行為は相手の行動に関するある描写を、明示的にあるいは暗黙に含んでいる。「ウロウロしたらあかん」という発話は、相手の行動を「ウロウロしている」と描写することを含んでいる。注意を向けられる者は、自分自身の行動に関する相手の描写をさし向けられる。いくつかの先行研究によれば、会話の中でこのような性質を持つ発話を向けられた者は、次にそれを自分自身による描写によって置き換えるのがふつうであり、また相手はその置き換えを承認するのがふつうである。会話の中で人は、自分のことを自分で描写する権限のようなものを認め合っていると考えられる。しかしながら、注意を受けられた子供にはこの権限があまり認められていないようだ。「ウロウロしたらあかん」と言

われて「ウロウロしてないよ」と返した子どもは、次に「それはウロウロのうちにに入る」などと切り返されてしまうからである。「誰が誰の行動を描写する権限を持つのか」というこの問題は、さまざまなタイプの言語活動に関わる重要な問題である。たとえば「告げ口」「愚痴」「陰口」などは、みなこの問題に顕著に関わっている。

今年の7月に、注意という言語行為について英語圏の聴衆に話す機会があった。そのとき気づいたのは、大人から子供に向けられる言語行為を指すものとしての「注意」という日本語に該当する適切な英語の単語がないことである。それは“warning”, “reminding”, “cautioning”, “advising”など複数の単語にまたがる広い意味を持っている。この経験は、言語行為の分析において日常語の(vernacular)行為ラベルをどう取り扱うべきかという方法論上の問題について改めて考える機会となった。会話分析の

主導者シェグロフは、日常語のラベルに頼ることなく言語行為の分析を行うべきであると長年主張してきたが、同時に会話分析の努力は、英語圏で日常語として自然に用いられている行為ラベル(“question”, “invitation”, “request”など)のリアリティを形式的分析によって再構成することにも向けられてきたと思う。私たちも、「質問」「勧誘」「依頼」などの翻訳語ラベルをデータに貼り付けて満足するのではなく、むしろ「訊く」「誘う」「頼む」といった日本社会における日常語の行為ラベルのリアリティを再構成できるような形式的分析をめざすことが必要だと思う。「注意」のように翻訳困難なラベルを持つ言語行為の分析は、このような試みの格好の試金石にもなるはずなのだが、今はまだその見通しの困難さの前で立ちすくんでいる。

(くしだ しゅうや)

ニュースレター担当：学会誌事業委員会

音声の出る教科書や問題集を出版してみませんか 本から音が出る。これは語学教育を変えるIT教具です。

日本語、外国語を問わず、語学教育には最適の教材が

あなたの手によって製作可能になりました。

出版なさりたい方は
当校に御連絡ください。
総集指導の研修
制度もあります。

定価 8,000円
(消費税別)

日本語、音声教育の新システム

CD-ROM やカセットのように頭出しをしたりする手間は全くかかりず、音を出したいと思ったところをなぞるだけで声や音が出ます。実際に作成された教材、「新実用日本語シリーズ」を一度手にとって見て下さい。あなたのアイデア次第であらゆる可能性が広がります。

問い合わせ先・(学) 新宿日本語学校 サウンド・リーダー事業部

学校法人江副学園

新宿日本語学校

169-0075 東京都新宿区高田馬場 2-9-7 電話 03-5273-0044 www.sng.ac.jp

二次元コード読み取りのサウンド・リーダーは新宿日本語学校が生産している教具です。



テキスト型データ解析ソフト

WordMiner®

ワードマイナー

テキスト型データからの情報抽出・論理発見のツール

「ナマの声」や「文章」に
ひそむ、人の
“ここる”を探り出す。

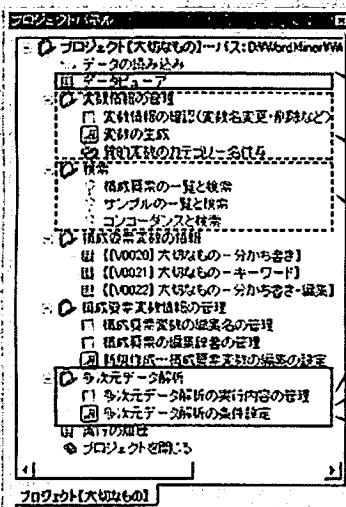
「テキスト型データ解析
ソフトウェア」

Windows対応

テキスト型データ解析ソフトウェア「WordMiner」は、独創性のあるソリューションです。固定化されたアルゴリズムに裏づく解析手法を使用する従来のテキストマイニングツールでは困難だったことまさまで視点からの探索的な多次元データ解析を実現。収集された数値的なデータと言葉や文字といったテキスト型データを併用し、情報の中に潜む、顧客や消費者たちの本音を容易に探し出すことを可能にします。その機能面の確かな技術力は、研究所や教育機関をはじめ多数の導入実績が示しています。

優れた機能をカンタンに活用、しかも廉価!

- 廉価であるWordMiner Version1.1 20万円(税別)
- テキスト型データのマイニングを身近な机上のPCで実現
- 高価なワークステーション等の設備投資は不要
- エクセル、ワードプロセッサ、統計用ソフトウェアなど、他の対応ソフトとの接合性に優れている



「観察する」

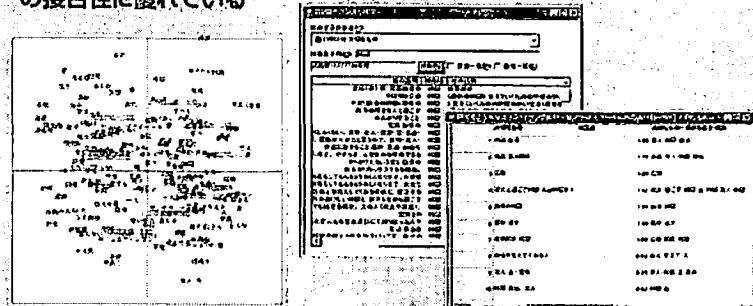
「整える」

「検索する」

「要約する」

「比べる」

「分ける」



【動作環境】

- CPU Intel社Pentium以上のCPUを利用したPC/AT互換機
- OS 下記の日本語OSが最新の状態で正常に作動していること
Windows95/98/NT4.0/2000/ME
Internet Explorer V5.0以上が最新の状態で正常に動作していること
- 推奨作業環境 CPU500MHz以上、メモリー128MB以上、
ハードディスク容量500MB以上

dip 日本電子計算株式会社

ビジネスソリューション事業部

〒135-8388 東京都江東区東陽2-4-24

TEL. 03-5690-3203 FAX. 03-5690-3243

E-mail WordMiner_info@is.dip.co.jp

URL <http://www.dip.co.jp/si/soft/wordminer.html>